

“英雄譜” 諸本について

氏 岡 真 士

上下二段に『水滸伝』と『三国演義』を併載した刊本が、およそ明末から清代にかけていくつも出された。その多くが書名に“英雄譜”の三文字を有する。これらのテキスト群の相互関係については、必ずしも明らかにされていない面がある。本稿によってそれを多少なりとも補い、関連の諸研究に裨益できれば幸いである。

1. 三つの『二刻英雄譜』

“英雄譜”諸本のうち今日、もっとも人口に膾炙しているのは京都大学文学部所蔵の『二刻英雄譜』であろう。その影印は『京都大学漢籍善本叢書』の第一期第20巻として、1980年に同朋舎から出版されている。ちなみに『古本小説集成』（上海古籍出版社、1992年）所収の『二刻英雄譜』は、その「前言」では“本書據日本東京内閣文庫藏本影印”と称するものの、実際はやはり京大蔵本を基礎とするであろう。たとえばその巻一第1葉a面（以下“1 a”の如く略す）には、不鮮明ながら京大の蔵書印が見える。

同朋舎の影印本には小川環樹「解説」が付され、京大蔵本の特徴をいくつも指摘している。下段『三国演義』における関索の扱いや、上段『水滸伝』と“余文台刊本”（余象斗の評林本を指す）との密接な関係、あるいは双方にわたる江戸時代の所蔵者による書き込みについてなどだが、本稿に直接関わるのは以下の部分である。

本書は各巻の初めに「精鑄合刻三国水滸全伝」と題するが、版心に「二刻英雄譜」とあり、また各巻の終わりに「英雄譜某巻終」とあるから、以下その別名を用いて「英雄譜」と称することとする（二刻とは、第二版を意味すると思われる）。毎葉を上下二段に分ち、上段に「水滸伝」、下段に「三国志」（三国演義）を刻する。毎半葉、上の欄は十六行行十四字、下の欄は十四行行二十二字。内閣文庫および前田家尊経閣に蔵せられる雄飛館本と同種の版本で、明末（十七世紀）の刊行と想われるが、巻首

にあるべき序、目録、図像などの一冊を此の本は缺く。故の本学教授鈴木虎雄博士の旧蔵で、全二十巻を十冊に綴っている。

雄飛館本とは、封面に“雄飛館主人識”なる識語があり、また序（「英雄譜弁言」）が“熊飛赤玉甫書于／雄飛館”と結ばれるのでそう呼ぶ（なお“／”は改行を示す。以下同じ）。この影印本では、図像以外は落丁部分もふくめて内閣文庫蔵本から補っている。孫楷第は、内閣文庫蔵本の図像の賛に張瑞図や張采の名が見えることから（59b・63b、71b）、これを崇禎刊本と断じている（『日本東京所見小説書目』人民文学出版社、1981年）。

さて「解説」に紹介された三つの『二刻英雄譜』は、どのくらい同種なのか。また、ほかに関連する版本は無いのだろうか。この二つの問題について以下、考えてゆきたい。

まず前者から始めよう。三つのうち尊経閣文庫蔵本は、封面に“二刻英雄譜／平虜伝／右两部ハ 内閣文庫所蔵本と／同じ。”と書かれた付箋がついている。「按晋平陽侯陳寿史伝総歌」1葉や巻四第42葉、巻十第27葉を欠き（逆に内閣文庫蔵本は巻七第27葉を欠く）、版木の裂痕が目立つ印象もあるが、後述する諸問題を中心に検討しても、付箋の指摘を覆し得る観察結果は筆者には得られなかった。ほかに図像の画題の位置が微妙に違う場合があるのは、二色套印の結果としての誤差の範囲であろう。したがって本稿では尊経閣文庫蔵本については、内閣文庫蔵本と同版と見なし、以下とくに言及しない。

その内閣文庫蔵本だが、つとに大内田三郎氏が『水滸伝』に即して、京大蔵本との校勘を行ない、同版ではないと指摘しているので（「『水滸伝』版本考一『二刻英雄譜』について」、『天理大学学報』第129輯、1981年）、そちらへ話を進めよう。

2. 四つの相違点

大内田論文では、次のように概括している。

『内閣本』と『京都本』の主な異同は、概ね、次の四点にまとめられる。一、『京都本』に、多くの俗字が用いてある。二、『京都本』だけに載せた詩がある。三、『京都本』に、ない字句がある。四、『京都本』は、半葉の行数が十五行の個所がある。このうち「一」について、大内田論文は『水滸伝』から22箇所を例示する。他にも、京大蔵本は巻一1aだけで『水滸伝』に“忠義実堪欽”、『三国演義』に“机謀不密”“尽被大浪”“自此边界”の計4例を挙げ得る。

「二」と「三」は、どちらも第99回（巻十七）に関わる。まず「二」だが、詩の有無の

ちがいが2個所に見られる。内閣文庫蔵本（これを影印したのが『明清善本小説叢刊』所収の『精鑄合刻三国水滸全伝』であろう。明記は無いし、現物と違って封面を欠くが、「英雄譜弁言」1aの蔵書印の痕跡などから察せられる）の巻十七46aは、第1行以下が次のようになっている。もとの版式をふまえて引用する（以下同様）。

不疑矣眾將退帳是夜孫安連發
狂數遭大叫三聲而死次日眾將
是孫安已死無不下淚卞祥令將
衣衾棺槨殯殮一面申文報宋先
鋒知然後定奪
卻說宋江在洮陽屯紮日夕令人

京大蔵本の巻十七46a 第1行以下は、こうである。

無疑矣眾將退帳是夜孫安連發
量數遭大叫三聲而死次日眾將
知孫安已死無不下淚卞祥令將
衣衾棺槨殯殮一面申文報宋先
鋒知然後定奪有詩嘆曰
七尺身軀氣勢雄當時功績已
成空不知驍勇歸何處時有杜
鵬泣血紅

卻說宋江在洮陽屯紮日夕令人

傍線を付したように、“有詩嘆曰”の語と挿入詩がある。のみならず第1～3行の各1字目も異なっており、京大蔵本のほうが読みやすい。

つぎに内閣文庫蔵本では、50a 第13行がこうなっている。

高三尺次日李俊一面招安燕青見

京大蔵本で対応するのは50a 第16行以下であり、ここでも詩などの有無が目につくが、さらに詩の次の行に“天明”・“來”の3字が多い。

高三尺有詩為證
朔風嚴凍門干戈卻似囊少巧計
多堪笑狂徒憑勢險枉交兵卒死
江波

次日天明李俊一面招安燕青來見

これらの詩2首は『京都本』にしか見られず、他の版本には載せていないので、恐らく『京都本』が、刊行される際に、独自に増補したものと考えられる”と大内田論文は説く。この点については、後で詳しく論じたい。

ちなみにこの2箇所の間、47bで宋江が引いた“東風正爾入江干……”というおみくじの文句は双方にあるが、その直前が内閣文庫蔵本は“解云”、京大蔵本は“如何道”となっている。そして引用した第1句は、内閣文庫蔵本では“爾”を“尔”に作るいっぽう、京大蔵本では“干”が“千”になっている。この検討も後に譲ろう。

さて大内田論文の「三」、つまり“京都本に、ない字句がある”箇所は、巻十七50bである。両本とも巻末に当たるのだが、内閣文庫蔵本では第10行以下が次のようになって終わり、若干行分の余白を残す。

卻被亂軍殺了特來報知宋江大悅

曰賢弟潛入城吾等四方尋覓今建

此奇功非小也宋江商議進兵不因

此去東鷲嶺下生出妖邪怪異紅桃

嶺上又見火滅煙消且聽下面分解

ところが対応する京大蔵本の第16行以下では、内閣文庫蔵本の第11～13行（傍線部）にあたる42字が無い。余白も無いぎりぎりの所に残る2行を詰め込み、辛うじて話を終わらせている。大内田論文は、最終行第3字“又”字の存在からみて京大蔵本が3行分を削っており、削除は下段の『三国演義』が50bで終わるのに揃えるためだと指摘している。

大内田論文の「四」だが、“『京都本』は、半葉の行数が十五行の箇所がある”として、具体的には第41回の途中から第47回の途中まで（巻七25a～巻八42b）計72葉を挙げる。そして“『三国志演義』も同様に、その箇所は、一行少なくなっている”と指摘する。確かに下段も巻七25aから半葉13行になり、この状態は巻八最終葉（44b）まで続く。前掲の「解説」では半葉が『水滸伝』16行×14字、『三国演義』14行×22字とされていた。

さらに大内田論文は、特に『水滸伝』について、半葉15行が始まる巻七25aの第1行“豹子楊林他与小弟相契楊雄曰”から同27b第3行の“只要還我鷄石秀怒曰你詐哄誰”まで計78行が、直前にある巻七22b第3行～同24b第16行（最終行）の計78行と重複すること、また巻七第38葉の落丁、巻八第25・26葉の乱丁があることを指摘している（落丁について“七卷三十八丁（p. 640）と三十九丁（p. 641）の間に一丁落丁”とするが、葉数表示不鮮明なが

ら第37葉が2枚重複したあと第39葉が続くと見受けられる)。重複は、下段の『三国演義』にも見られ、巻七25 a 第1行“得孔明以師礼待之……”から同27 b 第9行“見糧草車輛……夏侯蘭韓浩来救”まで74行が、巻七22 a 第11行～同24 b 第14行（最終行）と同じである。

ところで、大内田論文の言う“半葉の行数が十五行の個所”においては、『水滸伝』が毎行13字になっている。じつは各半葉の行数や字数が一定しないのは、ここに限ったことではない。たとえば前述の巻十七第50葉は、京大蔵本では『水滸伝』が半葉17行と前葉までより1行多く、毎行の字数も a 面第5行までは毎行13字になっている。

そこで行数と字数の全体的状況を、以下に見ておこう。

京大蔵本では、『水滸伝』は巻一1 b からしばらく半葉17行×14字である（1 a を16行と数えるのは最初の2行“精鑄合刻三国水滸全伝巻之一、甲集／錢塘施耐庵編輯”が大字で3行分を占めるため。各巻ともこれに準じ1 a は一行少ない）。それが巻一38 b で半葉16行に変わり、しかも第6行から毎行13字になる。巻二46 a からは再び半葉17行×14字に戻るが、巻三では半葉16行×13字が復活する。ところが巻六38 a 末尾の第16行は14字あり、同38 b から半葉17行×14字となる。巻七でまたもや半葉16行×13字が始まり、大内田論文の説くように巻七25 a からは半葉15行になるが、毎行13字は変わらない。

巻八43 a からは半葉16行×14字になるが、巻九で半葉16行×13字に戻る。巻十一44 b 第9行～同45 a 第13行だけ毎行14字なのを挟んで、毎行13字が続き、巻十五38 b 第14行で毎行14字となるが、やはり巻十六で毎行13字に戻る。ここまで半葉16行は変わらない。

そして既述のように、巻十七50 a 第6行から毎行14字に増え、行数も半葉17行となる。だが巻十八では、又しても半葉16行×13字となって、このあとは巻二十の結末までそれが続く。

内閣文庫蔵本もほぼ同様だが、巻七・巻八は半葉16行×13字が続き、巻八40 a 第13行から毎行14字、同40 b から半葉17行となって、最後の半葉（41 b）第11～16行は下段にも割り込んで毎行14字となる（なお巻三末尾では両本とも割り込みが見られる）。また巻十七が毎行14字になるのは50 a 第3行からだが、両本は“淮西軍卒散漫逃生危招徳急披掛”の行から14字になる点で共通する。行数の違いは、既に述べた詩の有無が影響している。

なお『三国演義』は、京大蔵本で前述の巻七25 a ～巻八最終葉（44 b）が半葉13行×22字なのを除けば、両本とも半葉14行×22字で安定している。上下2段といっても下段のほうが大きい点とも相俟って、『三国演義』を主とした編集であることが窺える。

3. 新たな問題点

以上に見た四つの相違点から、俗字を筆画の多い正字に改めるのは煩瑣なことや、卷十七末尾の3行削除を踏まえて、京大蔵本が後刊だというのが大内田説である。これはその通りであろう。関連して京大蔵本は、内閣文庫蔵本に比べると墨抹が目立つし（たとえば卷一5b『三国演義』に2箇所）、傍点傍批が消えている部分もある（たとえば卷二27b『三国演義』が顕著）。

ただし京大蔵本は、『水滸伝』において詩2首が多いことも大内田論文は指摘していた。他の版本には見られない詩であり京大蔵本独自の増補だというのが大内田説だが、この点はどうであろうか。どちらの詩も他の版本に見られる場合があり（たとえば挿増乙本卷二十二18a、同21a）、少なくとも京大蔵本オリジナルの詩というわけではない。

また大内田論文の指摘とは別に、京大蔵本と内閣文庫蔵本の双方ともに奇妙な部分が、『水滸伝』にはある。それは卷一32a最終行から同33a第1行にかけてである。

智深走入店裡坐下叫曰店主買酒
是行脚僧游方到此經過店主曰和
尚若是五台山寺裡的師父我卻不
敢賣與你吃……

……曰俺多時

不曾拽拳使脚覺得身體困倦且使
吃店主曰和尚你那裡來智深曰俺
幾路只一膀子扳打在亭子柱上只

32b最終行にあたる傍線部は前後とつながりが悪い。これは32a最終行“智深走入店裡……”の次に来るべきであろう。つまり尊経閣文庫蔵本もふくめて『二刻英雄譜』では、卷一32b第1行にあるべき傍線部“吃店主曰……”が、同最終行に混入しているのである。

これらの新たな問題点は、「解説」に紹介された三つのテキスト以外に関連する版本は無いのかという、本稿のもう一つの課題につながる。

4. “二刻”を称さない『英雄譜』

白木直也『和刻本忠義水滸伝の研究』（私家版、1970年）に、次の記述がある。

二刻英雄譜は私の知る限り三種のものがある。一つは現内閣文庫蔵本で……。二つは……現に京都大学の有に帰している。三つは東京教育大学の蔵本、松井簡治博士の旧蔵に係る。但々前二者とは異なり、体裁の面で前二者の欠点を訂した迹が認められ識者の間では内閣文庫蔵本の後刻と云はれている。

白木氏のいう“東京教育大学の蔵本”について、聶紺弩「《水滸》五論」（『中国古典小説論集』上海古籍出版社、1981年）にも、次の記述がある。

雄飛館刻《精鑄合刻三國水滸全傳》中的《水滸傳》（下稱《雄飛館本》）。二十卷一百十回……此本有初刻、二刻兩種。初刻扉頁板框三面為曲線花紋，惟版心一面為直線。板心無字。上欄半頁十六行，行十四字（日本東京文理大藏，部分書影王古魯藏）。二刻……正文上欄半頁十七行，行十四字，下欄三國署題，於陳壽、羅貫中之後，多一“明溫陵李載贊批點”字樣（日本内閣文庫藏。書影、照片人民文學出版社藏，底片王古魯藏）（參閱孫楷第《在日本東京所見之明本水滸傳》）。

現在では筑波大学附属図書館が、この版本を『筑波大学和漢貴重図書目録』（赤版、1996年）で紹介し、またインターネットで公開している。ただし「水滸伝英雄姓氏」「三国英雄譜帝后臣僚姓氏」（上下二段）の1b～2aが漏れている（2012年12月現在。巻九9b～10aは原缺）。なお原本は、巻一第38葉が第33葉のあとに続くように乱丁もある。

白木氏と聶氏では、内閣文庫蔵本との関係について意見が食い違う。この筑波大学蔵本を見てみると、どこにも“二刻”とは称していない。封面も版心も『英雄譜』の3文字だけである（巻一第1～5葉版心のみ“合刻英雄譜”の5字）。また封面の辺欄は、龍を上下両辺と右辺の上下に計4匹、朱墨套印で配する凝ったものである。のどに当たる左辺は綴じこまれていて見えないが、ここにも更に2匹の龍が鎮座しているものと思われる（聶氏は恐らく不鮮明な白黒写真によったため、のどを辺欄と誤解し、左辺を直線だと述べたのであろう）。それに比べて『二刻英雄譜』の封面は、やはり朱墨套印とはいえ、辺欄は黒い実線に過ぎず裝飾性に乏しい。そのうえ封面の欄外上方に“二刻重訂無訛”と大書する（封面は、文字が“英雄譜”以外は朱色）。版心にも多く“二刻英雄譜”と記す。

白木氏は筑波大学蔵本に“欠点を訂した迹が認められ”と言うが、具体的な指摘は無い（第5節参照）。後刻と見なした他の理由として、図像100葉を欠く点が考えられる。後刻本が100葉もの図讀の覆刻を怠ったというのはありそうな話である。ただ“わが国では、絵を重要視し、特に画家が資料として大切にされたため、首冊が本文と分かれてしまったことが多い。成實堂文庫所藏盛明雜劇、富岡文庫旧蔵列国志伝などの口絵はかくて本文から

分離したのである”（「わが蒐書の歴史の一斑」、『長沢規矩也著作集』第6巻、汲古書院、1984年）とも言われる。筑波大学蔵本にも類似の背景が想定可能である。

また『二刻英雄譜』の奇数巻巻頭は下段第4行に“明温陵李載贄批点”とあるのに、筑波大学蔵本では空白になっている（巻一・三・五・十五以外は“批点”の2字のみあり）ことも、後刻と見なした一因だろう。つまり後出本が発禁のため李卓吾の名を削ったと考えるわけである。しかし顧炎武『日知録』巻十八「李贄」も述べるように、この禁令がどこまで実効性を伴ったかは疑わしい。また“国朝”や“皇明”ではなく“明”とだけあるので、逆に誰かの名前を削って李卓吾の名が後から加筆された可能性もあるだろう。実際に三十巻本『水滸伝』において、そのように考えられる例が見られる（氏岡真士「三十巻本『水滸伝』について」、『日本中国学会報』第63集、2011年。なお『文簡本を中心とした「水滸伝」の研究』科研報告書別冊、2012年参照）。

そこで一般論より具体的な論拠を求めて、比較対照を進めよう。その際『二刻英雄譜』は、先行するであろう内閣文庫蔵本に代表させ、必要に応じて京大蔵本に触れる。

まず気づくのは概して、筑波大学蔵本よりも内閣文庫蔵本のほうが各部分の葉数が少なく、いっぽうで半葉あたりの行数が多いことである。

封面のあと「英雄譜弁言」「叙英雄譜」「按晋平陽侯陳寿史伝総歌」と続くが、この「歌」の末行に筑波大学蔵本では“歌畢”の2字がある以外、ここまで顕著な違いは無い。ところが、そのあとの「三国志目次」が筑波大学蔵本では半葉10行なのに対し、内閣文庫蔵本は半葉11行と1行多い。毎行20字である点や字句・字体などは変わらないが、けっきょく前者の全13.5葉に対し、後者は全12葉と減っている。なお版心も“目録”と“二刻英雄譜、三国目録”のように違っている。次の「水滸伝目録」もこれに準じ（筑波大学蔵本の版心は単に“水滸目録”）、総数も12葉（ただし12bは原缺）と11葉で1葉違う。続いて上下段に分かれ「水滸伝英雄姓氏」「三国英雄譜帝后臣僚姓氏」となるが、これも内閣文庫蔵本は半葉ごとに1行多い。結果として総数も14葉で、筑波大学蔵本の14.5葉より減っている。

このあと本文に入る。まず筑波大学蔵本は全体に俗字などが少ない点で、京大蔵本よりも内閣文庫蔵本に似ている。（なお上下段とも人名に傍線が引かれるように見えるのは読者の朱筆。さかのぼって「水滸伝英雄姓氏」「三国英雄譜帝后臣僚姓氏」も同じ）。

さて筑波大学蔵本の『水滸伝』について、聶紺弩が半葉16行×14字だというのは、必ずしも正しくない。むしろ半葉15行×13字の場合が多い。いずれにせよ内閣文庫蔵本よりも半葉あたりの字数が少ないことになる。『三国演義』も筑波大学蔵本は半葉13行×22字で、

これは一定しているが、やはり半葉あたり1行少ない。したがって各巻の葉数は、目次など同様に、筑波大学蔵本のほうが多いのである。そのかわり、内閣文庫蔵本の巻三や巻八のように、『三国演義』最終葉の余白に『水滸伝』の末尾が詰め込まれることも無い。全体的に筑波大学蔵本のほうが、ゆとりのある造りになっている（例外的に内閣文庫蔵本巻八32aの『水滸伝』の詩は、各句改行する）。

筑波大学蔵本『水滸伝』の半葉あたりの行数字数のゆれを、以下に挙げる。

巻一1aは半葉15行×14字であり（その理由は“精鑄合刻三国水滸全伝巻之一、甲集／錢塘施耐庵編輯”と記す初めの2行で3行分を占めるため。以下の各巻頭半葉もこれに準ず）、1bからしばらくは半葉16行×14字だが、巻一41a第1行“将李忠動問哥哥縁何做和尚智”から半葉15行×13字となる。以下、巻二49a第1行“衣秀士王倫第二个摸着天杜遷第”から半葉16行×14字に戻るが、巻三では半葉15行×13字が復活する。巻六第41a第1行“看親一遭再来相见以満小道之願”から半葉16行×14字となるが、巻七でまた半葉15行×13字が始まる。巻八43a第1行“那一鞭正在刀口上錚地一声響火”から半葉16行×14字に戻るが、巻九でまたもや半葉15行×13字が復活する。巻十一48a第1行“足慮哉区々不才親引一枝軍馬尅”から同48b第5行まで毎行14字なのを挟んで毎行13字が続き（48aは半葉16行）、巻十五42a第1行“絶糧而死関勝徒之遂分兵四面围”から半葉16行×14字になる。巻十六では半葉15行×13字に戻るが、その54a第1行“淮西軍卒散漫逃生危招德急披掛”から半葉16行×14字になる。巻十八で半葉15行×13字に戻り、あとは巻二十の結末まで変わらない。

筑波大学蔵本と内閣文庫蔵本の各巻における総葉数を比べてみると、いずれも前者より後者のほうが少ない。巻一最後の半葉は前者が49aで後者が45b、巻二は前者が50bで後者が47b。以下、巻三は58bと54b、巻四は45bと42b、巻五は55aと51b、巻六は47bと44b、巻七は54aと49b、巻八は44bと41b、巻九は47bと44b、巻十は54aと50b、巻十一は50aと46b、巻十二は50bと47a、巻十三は52bと48b、巻十四は45bと42b、巻十五は45bと42a、巻十六は53aと49b、巻十七は54bと50b、巻十八は46bと43a、巻十九は44bと41b、巻二十は37bと35a、となる。

『水滸伝』における挿入詩の多寡も指摘できよう。筑波大学蔵本では詩詞があるのに、内閣文庫蔵本では無い個所が、とくに後半に目立つ。まず巻一で前者48b～49aに2首あるが、対応する後者45bには見当たらない。以下、列記すれば、巻十一の前者24b・28a・41a・48bと後者23a・26a・38a・45a、巻十二の前者23a・28b・34a・41bと後者21b・26b・31b・38b、巻十三の前者17b・21a・33a・41b・49bと後者16a・19b・

30b・38b・46a、巻十四の15a・23b・29bと後者14a・21b・27b、巻十五の前者15a・15b・23a・35a・41b・43b・44aと後者14a・14b・21b・32b・38b・40b・41a、巻十六の前者11aと後者10b、巻十七の前者17a・20b・23b・35a・45aと後者16a・19a・21b・32b・41b、巻十八の前者12b・21b・42bと後者12a・20a・39b、巻十九の前者13b・23a・36bと後者13a・21b・34a、巻二十の前者10a・25a・35aと後者9b・23b・32bにおいて、同様の関係が認められる。

5. 『二刻英雄譜』との関係

では本文中の特徴的な個所はどうか。まず第3節で述べた、『二刻英雄譜』巻一32b最終行に、本来なら同第1行にあるべき“吃店主曰”云々が混入している個所である。対応する筑波大学蔵本巻一34a第15行～35a第1行では、問題の1行が正しい位置にある。白木氏のいう“欠点を訂した迹”（第4節参照）とは、この事であろうか。

智深走入店裡坐下叫曰店主買酒
吃店主曰和尚你那裡來智深曰俺
是行脚僧游方到此經過店主曰和
尚若是五台山寺裡的師父我却不
敢賣與你吃……
……曰俺多時
不曾拽拳使脚覺得身體困倦且使
幾路只一膀子扳打在亭子柱上只

問題の行は34aの最終行（第16行）に位置している。ここで『二刻英雄譜』のほうは、一般に半葉あたりの行数が多いことを想起されたい。すると、そこでは“吃店主曰”云々が奇妙な位置にあるのは、被せ彫りに際して切り貼りをして行数を調整する際にミスしたことが考えられる。つまり筑波大学蔵本が初刻で、小川環樹「解説」も言及するように“二刻”とは第二版の意味ではないか。

訂正では説明しにくい個所も多い。たとえば巻七巻頭の“於耐庵”は筑波大学蔵本も『二刻英雄譜』もそのままである。また筑波大学蔵本巻十七54bの最後の5行には、前述の大内田論文の「三」にいう“京都本に、ない字句”3行42字が存在する。

卻被亂軍殺了特來報知宋江大悅

日賢弟潛入城吾等四方尋覓今建

此奇功非小也宋江商議進兵不因

此去東鷲嶺下生出妖邪怪異紅桃

嶺上又見火滅煙消且聽下面分解

これで上段に過不足無く収まり、余白はまったく無い。しかも大内田論文の「二」、卷十七に京大蔵本が独自に増補したとも言われる詩2首だが、これも筑波大学蔵本は有する(卷十七49b・54a)。前後の字句の異同や毎行の字数の違いも含めて、すべて一致する。

無疑矣眾將退帳是夜孫安連發

量數遭大叫三聲而死次日眾將

知孫安已死無不下淚卞祥令將

衣衾棺槨殯殮一面申文報宋先

鋒知然後定奪有詩嘆曰

七尺身軀氣勢雄當時功績已

成空不知驍勇歸何處時有杜

鵬泣血紅

卻說宋江在洮陽屯紮日夕令人

……

高三尺有詩為證

朔風嚴凍門干戈卻似囊少巧計

多堪笑狂徒憑勢險枉交兵卒死

江波

次日天明李俊一面招安燕青來見

筑波大学蔵本は、内閣文庫蔵本と京大蔵本の双方に基づいて一々修整したのであろうか。しかし、そこまでのほどの“欠点”であろうか。むしろ『二刻英雄譜』を筑波大学蔵本の覆刻だと考えるほうが穏当であろう。これについては、次節で更に論拠を挙げる。

筑波大学蔵本は、どちらかといえば京大蔵本よりも内閣文庫蔵本との親近性がある。大内田論文の「一」に関連して、筑波大学蔵本も俗字が少ないことは既に述べた。また「四」についても、卷七25aの第1行“豹子楊林他与小弟相契楊雄曰”から同27b第3行の“只要還我鷄石秀怒日你詐哄誰”まで計78行は、京大蔵本とちがって重複しない。下段の『三国演義』も京大蔵本とちがって、やはり重複は無い。

ただ巻十七の“冬風正爾入江干……”というおみくじの文句は、筑波大学蔵本でも巻十七51 a にあり、その直前は内閣文庫蔵本同様“解云”と記すが、引用した第1句の“干”は“千”のように見え、しからば京大蔵本と同じである（あるいは“干”の第一画がかすれたものか）。また“爾”の字体も京大蔵本と同じで、内閣文庫蔵本の“尔”とは異なる。

この“干”と“尔”だが、前者は川の畔という意味からも押韻の点からも“江干”が正しい。後者は内閣文庫蔵本が俗字を用いている珍しい例である。内閣文庫蔵本は覆刻の際に、“干”を“干”に直すついでに、“爾”を“尔”と書いてしまったのではないだろうか。もっとも数行あとで呉用がおみくじの意味を説明する部分では、どのテキストも“尔”と書いているから、内閣文庫蔵本はそちらに合わせた可能性もあるだろう。

いっぽう内閣文庫蔵本に無い詩2首やその前後の字句若干の点で、筑波大学蔵本は京大蔵本と共通していた。この2首の中間に、おみくじは出てくる。とすれば、この前後については筑波大学蔵本と京大蔵本との直接的関係も想定が必要だろう。ただし後述するように、内閣文庫蔵本と京大蔵本が筑波大学蔵本から枝分かれしたという意味ではない。

6. 内閣文庫蔵本との関係

内閣文庫蔵本のほうが筑波大学蔵本より後出だと考えるのは、前述のように半葉の行数や毎行の字数も大きく関わってくる。

すでに述べたように半葉あたりの本文行数が、筑波大学蔵本は15～16行なのに対して、内閣文庫蔵本は16～17行であった。「目次」や「姓氏」も内閣文庫蔵本のほうが1行多い。こうすることで、全体的に葉数を減らし、版木を節約することができる。後出の場合、このほうが制作費を抑えられるから自然なことではあるまいか。

のみならず、毎行の字数が目目される。筑波大学蔵本の場合、基本的にa面第1行から毎行の字数が変わり、b面や巻末の最終行まで続く。内閣文庫蔵本とちがって、葉の途中で毎行の字数が増減することは、巻十一48 bを除いて無い。これは内閣文庫蔵本のほうが不自然であろう。そしてその理由は、筑波大学蔵本のごときテキストを切り貼りして、被せ彫りで覆刻したことに求められる。そのために、葉の途中で字数が変わるのである。なお筑波大学蔵本巻十一第48葉が、毎行14字で始まって、b面の途中で毎行13字になるのは、おそらく巻末に近づき、下段の『三国演義』との兼ね合いで例外的に字数調整を行なったのであろう。巻十一は50 a までだが、『三国演義』は2行弱、『水滸伝』に至っては

最終行7字分しか余白が無い。

覆刻の論拠は、さらに下段の『三国演義』からも得られそうである。たとえば『二刻英雄譜』巻十三15bの『三国演義』において、“魏兵大半”云々という終わりの4行は、第10行目までに比べると行頭に1字分の空白がある。しかしここは挿入詩や引用文ではなく、地の文の続きなのである。しかもこの4行は、数えてみると毎行22字ある点で前行までと変わらない。これは筑波大学蔵本巻十三17aの縦幅が16bより短いことを見れば分かるように、オリジナルのサイズの違いに由来する。その17aは“魏兵大半”から始まる。

あるいは巻十八の末尾46bは破損もあるが、その『三国演義』は内閣文庫蔵本や京大蔵本より3行多い。

孫峻已殺諸葛吳主亮封峻〔……〕

侯總統内外軍事自此權柄〔……〕

維起兵伐魏未知勝負如〔……〕

ここは決まり文句の部分であるから、本来あった部分を、『二刻英雄譜』では被せ彫りのとき忘れてしまったのであろう。この『三国演義』は、当該個所を含む部分が“夏振宇本かあるいは……「李卓吾評本」に近い”と見られる（中川論『「三国志演義」版本の研究』汲古書院、1998年）。参考までに夏振宇本の対応個所を引いておこう（『三国志演義古版叢刊続編』全国図書館文献縮微複製中心、2005年）。

卻說孫峻殺了諸葛吳王孫亮封峻為丞相大將軍富春侯總
督中外諸軍事自此權柄盡歸於孫峻矣卻說姜維在成都聞諸
葛恪訃音遂入朝奏准後主復起大兵伐魏早有細作人報知司
馬師未知勝負如何且聽下回分解

なお『三国演義』については『二刻英雄譜』のほうが杜撰とは限らず、“重訂”した部分も確かにある。まず筑波大学蔵本の巻十一2bを見よう。

思此機會一失再幾時一遇沉吟之間不覺張昭曰極易

也先差一人只帶五百軍扮作適間之事張昭曰極易也

先差一人只帶五百軍扮作商人潛到荊州下一封密書

対応する内閣文庫蔵本や京大蔵本の巻十一2bでは、傍線部が空白になっている。確かに傍線部は前後の字句と重複しており読みにくい。そこで『二刻英雄譜』はこれらを削るかたちで“重訂”したのであろう。けして筑波大学蔵本が訂正したのではあるまい。

付言すれば『列国志伝』の“朱篋本”と“龔紹山本”のように、先行する前者が半葉11行×

20字で後者は半葉10行×20字というケースもある（大塚秀高「講史章回小説の出版と改変—『列国志』をめぐって」、『中国古典小説研究動態』第3号、1989年。なお同氏「三統研究前後」、『中国古典小説研究』第4号、1998年参照）。この場合は後者のほうが、半葉あたりの行数を減らすことで豪華版を装っていたとされる。“朱篋本”と“龔紹山本”のあいだでは、一部の挿絵の簡略化や批評・詠史詩の配置変更が見られ、後者の操作によって版木を減らしていることも認められるので、行数の少ない“龔紹山本”が後出だと判断されたのである。だが“英雄譜”の場合、このケースを機械的に当てはめることは出来まい。上述の諸点を踏まえれば、やはり筑波大学蔵本のほうが原形に近いと思われる。

また瀧本弘之氏は『水滸伝』（『中国古典文学挿画集成』3、遊子館、2003年）において、『明清挿図本図録』（薄井君入堂記念会、1942年）の書影と薄井恭一氏の解説とから、薄井氏旧蔵の“劉次泉刻図本”と内閣文庫蔵本（“劉玉明刻図本”）を別本と認め、かつ前者が初刻、後者が二刻である可能性を指摘している。これについては“劉次泉刻図本”を調査する機会に恵まれるまで、待考としたい。

7. 京大蔵本との関係

京大蔵本は、よく見ると版心の姿が一定しない。

初めは上端に“二刻英雄譜”とあり、本文が上下段にちょうど分かれるあたりから巻数が記され、下方には下端とのあいだに余白を残して葉数が書かれる。これは内閣文庫蔵本と同様である。

ところが巻七第25葉から、一字一字が小ぶりになり、上は“英雄譜”の3字だけで“二刻”の2字は消え、巻数表示の上に黒魚尾が現れ、また下端に余白無く葉数が記されるようになる。内閣文庫蔵本とは明らかに違う。それが巻八最終葉まで続いて、巻九で元に戻る。

この黒魚尾つきの版心は、じつは筑波大学蔵本の当該個所と酷似する。おそらく例の京大蔵本における記述の重複が、真相を物語っていよう。つまり版木の裂痕などからも窺えるように、京大蔵本はこの巻七後半から巻八いっぱい、磨耗が進んでいるものの、筑波大学蔵本と同版なのである。巻七25a第1行からしばらく、『水滸伝』も『三国演義』も直前の記述と重複するのは、京大蔵本が異なる版を継ぎ足した結果であった。半葉あたりの行数や字数も同断である。

また巻十七第45～50葉の版心も、京大蔵本は明らかに内閣文庫蔵本とは違う。こちらは

筑波大学蔵本とも異なるが、たとえば葉数表記が、それまでの“四三”“四四”から、京大蔵本では“四十五”“四十六”のように十の字が入り、その表示位置も内閣文庫蔵本より上方に大きめの字で書かれている。なお第50葉下段に両本とも余白を2行ほど残すが、その余白において内閣文庫蔵本では『三国演義』本文が終わった次の行末に“十七巻終”と記し、京大蔵本では最終行行頭に“英雄譜十七巻”の6字を記す。さてこの部分の本文は、『三国演義』については大きな異同が無いものの、たとえば49 a 第1行“六出祁山”を“京大蔵本が六出祁出”に誤るいっぽう、同末尾2行で“司馬懿看了果然……”を内閣文庫蔵本は“司馬懿着了果然……”に誤記する。この2箇所は筑波大学蔵本ではいずれも正しく作っている(52 b、53 a)。いっぽう『水滸伝』では、詩2首や本文3行などの有無といった大きな相違が『二刻英雄譜』の間にあるが、筑波大学蔵本ではすべて備わっていた。

おそらく京大蔵本を編む際に、巻十七第45葉以降は、上段の『水滸伝』がそのまま利用するには難しい状態だったのであろう。ただ巻七巻八の状況から窺えるように、おそらく筑波大学蔵本系の巻十七該当部分も編集時に手元にあった。そこでこれを用いて、第50葉b面までに収まるように、京大蔵本は『水滸伝』の当該箇所を独自に編集し、版木を作り直したのである。その結果、詩2首は復活したが本文3行が犠牲になり、また『三国演義』では誤刻を訂正するいっぽう、新たな誤刻が生じたものと考えられる。

なお『二刻英雄譜』で巻十七『水滸伝』33 a 末尾の字が内閣文庫蔵本では“惧”、京大蔵本では“服”だが、対応する筑波大学蔵本36 a 第3行末尾は“惧”である。既に述べた墨抹の存在なども想起すれば、京大蔵本には内閣文庫蔵本を再覆刻した部分が多いであろう。

8. その後の“英雄譜”

佐賀大学附属図書館所蔵の『英雄譜』は、ここまで見た“英雄譜”諸本と紛らわしい。聖徳堂刊本とも呼ばれ、概要については別に紹介したが(氏岡真士「《征四寇》溯源」、信州大学『人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉』第46号、2012年。なお『文簡本を中心とした「水滸伝」の研究』科研報告書別冊、2012年参照)、封面とそれに続く「英雄譜弁言」はこれまでに見た“英雄譜”諸本に似ている。だが封面が黒一色で刷られ右端に“金聖歎批点合刻三国水滸全伝”を標榜したり、「英雄譜弁言」が半葉ごとに1行多いなどの違いがある。そのあとの目次は、上下二段にそれぞれ『水滸伝』と『三国演義』を配するレイアウトだから、明らかに別物である。本文も半葉あたり上段が16行×12字、下段が

15行×23字であり、しかも『水滸伝』は百十五回本の系統、『三国演義』は毛宗崗本の系統に属するテキストであって、これまた従来の“英雄譜”諸本とは異なる。

『二刻英雄譜』の場合、その『三国演義』が“夏振宇本かあるいは……「李卓吾評本」に近い”とされ、また『水滸伝』と“余文台刊本”（余象斗の評林本）との密接な関係も指摘されていることは、既に紹介した。筑波大学蔵本も基本的に同様と言えよう。『水滸伝』について少し補えば、最終回が目録では第106回、本文では第110回となっているが、目録は必ずしも信頼できず、実際に本文をたどると第9回と第75回の回数回目が抜けているので全108回という計算になる。なお評林本との具体的な関係は、別稿を用意している。

佐賀大学蔵本に戻れば、こちらの『英雄譜』は、いわゆる『漢宋奇書』の藍本と見られる。『漢宋奇書』は、やはり上下に『水滸伝』と『三国演義』を併載するテキストであって、今日でも少なくとも21の機関や個人が収蔵している（上田望「毛綸、毛宗崗批評『四大奇書三国志演義』版本目録（稿）」、『中国古典小説研究』第4号、1998年）。この『漢宋奇書』が、清代後半に非常に普及したことは贅言を要すまい。その封面に“金聖歎先生批点”“三国水滸合伝”などと記し、続いて「英雄譜弁言」や上下二段に『水滸伝』と『三国演義』を配する目次を載せる点や、本文が『水滸伝』は百十五回本の系統、『三国演義』は毛宗崗本の系統に属するテキストである点などから、佐賀大学蔵本『英雄譜』との継承関係が窺える。両者の本文の具体的な関係や、その成立が乾隆年間であろうことについては、『水滸伝』を中心に前述の「《征四寇》溯源」で論じた。

以上のように“英雄譜”系統のテキストは、様々なものが出ている。たびたび版を重ね、やがては模倣品にバトンタッチして更に普及したことになる。いかに多くの読者に支えられてきたかも、そこから窺えるであろう。

のみならず、その『三国演義』が定本化した毛本となるのに対して、それとカップリングされた『水滸伝』のほうは、けして金聖歎の七十回本にはならなかった点も注目される。おそらく『三国演義』に比べて、『水滸伝』の読者の嗜好は一元的でなかったことが、“英雄譜”諸本の隆盛から示唆されるのは興味深いことである。

もう一つ言えば研究上、従来は京大蔵本『二刻英雄譜』の影印本が多用されてきたように見受けられるが、本稿で詳しく述べたように、これは一種の合璧本である。むろん独自の価値はあるが、筑波大学蔵本は原形に近いうえ、せつかくウェブ上で公開されていることでもあるので、もっと活用されて良いように思う。